北陽演舞場という「場」と浪花踊観客の動線ー設計図と写真から紙上に復元するー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kasai, Junichi, Kasai, Tsukasa, Sawada, Shin メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00050969

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

人間社会環境研究　第35号　2018. 3

北陽演舞場という「場」と浪花踊観客の動線
―設計図と写真から紙上に復元する―

人間社会環境研究科　客員研究員（金沢大学名誉教授）
笠　井　純　一
人間社会環境研究科　客員研究員
笠　井　津加佐
ひょうごヘリテージ機構H^{2}O世話人（沢田建築文化研究所）
沢　田　　伸

要旨

大阪花街「北の新地」の北陽演舞場は，1915年に竣工した和風美術建築であった。ここでは毎春，北陽浪花踊が美々しく開演され，一般市民もこれを観覧するなど，花街と社会との接点ともいうべき施設であった。この建物は1945年６月の大阪大空襲で灰燼に帰したが，施工者：大林組には詳細な設計図と完成時の写真が多数残されている。本稿はこれら資料から北陽演舞場の平面構成と浪花踊観客の動線を紙上に復元し，その結果に基づいて，この建造物の劇場としての特色を追究した。

キーワード

和風美術建築，大林組，北陽演舞場設計図，北陽演舞場写真，浪花踊観客の動線

Hokuyo Enbujo and Traffic Lines of the Audience of *Naniwa-Odori*
: Paper Reproduction Based on Architectural Drawings and Pictures

Guest Researcher Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies
(Emeritus Professor at Kanazawa University)
KASAI Junichi
Guest Researcher Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies
KASAI Tsukasa
Manager of the Hyogo Heritage Organization (Sawada Architecture and Culture Laboratory)
SAWADA Shin

Abstract

Hokuyo Enbujo (Hokuyo Theater) in Kita-no-shinchi, which is an area of the Osaka *Kagai*, was completed in 1915 in Japanese-style art architecture. Here, *Hokuyo-Naniwa-Odori* was gorgeously performed every spring for an audience of general citizens. It was a facility where Kagai and society made came together and made contact. The building was burnt down by the Osaka Air Raid in June 1945. However, a lot of architectural drawings and pictures that were made at the time of the completion remained in Obayashi Corporation, who was the contractor. We restored the plane configuration of the

Hokuyo Enbujo and traffic lines of the audience on paper by using these documents. We investigated the characteristics of the theater architecture based on the results.

Keywords
Japanese-style art architecture, Obayashi Corporation, Architectural drawings of *Hokuyo Enbujo*, Traffic lines of the audience of *Naniwa-Odori*

はじめに

十五年戦争末期，北の新地一帯とともに焼失した北陽演舞場は，かつて大大阪の経済力を背景に，絢爛たる北陽浪花踊や舞踊温習会が催された「場」であった。さらにそこは，単なる上演の場に止まらず，日本文化の粋を集め，贅を凝らした特筆すべき和風建造物であった。施工者：大林組は最初に手掛ける美術的建築として，その技術力を傾注し，工芸の粋を蒐めた。

大阪花街はその殆んどが，過去のものとなりつつある。しかし筆者らは，北の新地に関わる調査を進める過程で，かつて大阪花街が担った役割の大きさに気づかされた[1)]。政治的中心が東京に移った後も，「上方」は近世以降の経済力を維持し，文化発信力を持ち続けたのである。その一端は，北陽演舞場に顕現していた。

しかも北陽演舞場は，浪花踊公演に象徴されるように，市民一般に開かれていた。本研究は，その「場」と市民がどのように接点を持ち，「場」の文化を受容したのかを，再現しようと試みるものである。浪花踊の観客は，花街の馴染み客ばかりではない。浪花踊に限って足を運ぶ，家族連れの観客が少なからずあった[2)]。北陽演舞場は浪花踊を媒体として，花街と社会との接点となったのである。大阪花街は本来，芸妓を媒介とする政治・経済・文化など多方面での活動拠点であったから[3)]，このような「場」が成立する素地が多分にあったものと思われる。

本稿は北陽演舞場と社会との関係を追究する第一歩として，まず残された史料の全貌を確認し，北陽演舞場という空間を視覚的に再現すべく，設計図や写真等から，建物内部の部屋配置と，浪花踊を観覧する市民や演者である芸妓他の動線を，紙上に復元する基礎的研究を行った。さらにその上で，戦前期の大阪四花街における当該演舞場の特色ついて考察した。史料確認と考察は笠井津加佐と笠井純一が共同で行い，紙上復原に関する研究は沢田伸が担当したが，本稿全体は三者が議論を重ねて取り纏めたものである。

なお筆者らは既に，北陽演舞場の各施設や調度についても検討を加え，また元観客や元芸妓から北陽演舞場に関する聞取り調査を行っているが，本稿では紙数の関係でほとんど言及できなかった。続稿においては，叙上の作業にもとづいて本稿の復元を裏付けるとともに，市民達がこの「場」をいかに受容したかについて，追究を行う予定である。

1．紙上復原のための北陽演舞場関連史料について

1.1 設計図

大林組には，1915年（大正４）の竣工時，および1932年（昭和７）の改築時の設計図が所蔵されている。筆者らはその中から，紙上復元に必要な下記の図面を提供していただいた。

1「曽根崎新地歌舞練場新築設計図　縮尺五十分之一」No.1（杮配置図）
2「曽根崎新地歌舞練場事務所及待合室配置図　縮尺百分之壱」No.2
3「曽根崎新地歌舞練場新築設計図　縮尺百分之壱」No.4，No.6（階上平面図），No.22（地形伏図及杮配置図），No.23（石割図），No.24（本館石割図，本館奈落廊下断面図），No.27（階下床伏図），No.28（本館階上床伏図，本館階

下床伏図）

4「曽根崎新地歌舞練場新築設計図　縮尺百分之壱　改正図」No.3（階下平面図），No.5（階上平面図）

5「曽根崎新地歌舞練場新築設計図　本館平面図（階上）縮尺百分之壱」No.7（階上平面図，地下室平面図）

6「曽根崎新地歌舞練場設計図　正面図　縮尺百分一」No.8

7「曽根崎新地歌舞練場設計図　右側面図　縮尺百分之一」No.9

8「曽根崎新地歌舞練場設計図　左側面図　縮尺百分之一」No.10

9「曽根崎新地歌舞練場設計図　横断面図　縮尺五十分之一」No.16

10「曽根崎新地歌舞練場地形之図　縮尺百分之壱」No.21（杭打地形図，地形伏図）

11「曽根崎新地歌舞練場事務所及待合所設計図　縮尺百分之壱」No.25（石割図）

12「曽根崎新地歌舞練場新築設計奈落改正図　縮尺百分之壱」No.26（奈落改正平面図，奈落床伏改正図）

13「曽根崎新地歌舞練場設計図」No.29，No.30（階上床伏図，地下室床伏）

14「曽根崎新地歌舞練場附属事務所及待合室新築設計図　縮尺百分之壱」No.31（固屋伏図，階上床伏図）

15「曽根崎新地歌舞練場設計図　縮尺五十分之一」No.33（花道迫場之箇所煉瓦積詳細図）

16「大阪曽根崎新地演舞場本館横断面図（舞台面）縮尺五十分之壱」No.19

17「大阪曽根崎新地演舞場本館横断面図（貴賓観覧席）縮尺五十分之壱」No.20

18「大阪曽根崎新地演舞場本館縦断面図　縮尺五十分之壱」No.15

19（階下廊下床板割之図，階上廊下床板割之図）（No.9）

20「大阪曽根崎新地演舞場」（縮尺五十分之一）（本館正面図，待合所正面図）（以下，無番号）

21（ラベル「曽根崎新地歌舞練場　内部改造工事　地階平面図　縮尺百分之一」）（敷地附近見取図）

22（ラベル「曽根崎新地歌舞練場　配置図及建築面積計算図　縮尺百分之一」（前面道路（幅員五間），側面道路，後方道路（幅員五間））

提供された設計図は合計30枚であり，3枚を除いてそれぞれに番号（上記No.で示したもの）が付されているが，「歌舞練場」と「演舞場」，「大阪曽根崎」と「曽根崎」などの名称，「崎」と「﨑」と「嵜」，「場」と「塲」，「曽」と「曾」などの漢字表記，筆跡，外枠の有無などに不統一が認められるので，一時期に起された図面ではなく，何度かに亘って作成されたものと推測される。「No.1，7」，「No.2」，「No.4，6，22，23，28」，「No.8，9，10，16」，「No.15，19，20，無番号（本館正面図，待合所正面図）」，「No.21，27」，「No.24，25，26」，「No.29，30」，「No.31」，「No.33」はそれぞれ別筆と推測される。また，「No.3，5」は筆跡は異なるが外枠が無い点で共通し，かつ「改正図」と表記されていて，明らかに他と別時点の作図と推定できる。ラベルが貼られたもの2枚（21，22），No.9の重複番号をもつ図面（19）は，文字情報が僅少で推測できなかった。

1.2　写真

筆者らが確認した北陽演舞場の写真は，大林組所蔵写真群A，佐藤家所蔵写真群Bである。番付などの二次史料の多くは，これらの転載であると思われる。また，佐藤家所蔵写真には大林組提供と推測されるものが多いが，独自のものも存在する。施工者である大林組には，建物そのものの外観，内部の技術や美術等に関わる写真が網羅的に揃っている。一方，佐藤家写真には演舞場の使用者側として，その関心に従って撮影したと思われる写真がいくつか含まれる。

A群とB群を対照するため詳細な別表を作成したが，今回は紙数の関係で割愛する。

1.3　大林組提供のその他史料

北陽演舞場に関する史料として，大林組より下

記文献の複写物をご提供いただいた。

・白田喜八郎編著『大林芳五郎伝』（大林芳五郎伝編纂会，1940年）

・『大林組建築家列伝　その1　松本禹象（まつもと　うぞう）』（未刊）

2．先行研究

北陽演舞場の建物に関しては，『建築雑誌』第343号に施工時の詳しい紹介記事が掲載されており，紙上復原の史料として極めて有益である[4]。また戦後は，関西大学大学院で大阪の近代和風建築の一つとして北陽演舞場を取り上げた，廣岡幸義氏の研究がある[5]。その他，北陽演舞場の写真を掲載・紹介した一般書や記事は枚挙に暇がないが，大阪市民との関わりを追究する研究文献は確認できなかった。

3．北陽演舞場の内部構成と観客動線の復原案

3.1　北陽演舞場と大林組

『大林芳五郎伝』[6] には，建築依頼をうけた折の芳五郎の思いが，次のように綴られている。

> 和風美術建築を扱ふ最初であり，部下係員の技術練磨上好箇の資料たるのみならず，大林組が美術建築への一期を画する重大意義も含まれてゐるので，全く利害を離れてたゞ単に「良いものを拵へよ，技術に活きよ，組の声価を高めよ」といふことのみ念願して進んだ

ここでは，この北陽演舞場が和風美術建築を扱う最初といっているが，この時期，大林組は意欲的に大工事を受注し施工にあたっている[7]。

1911年（明治44）　東京中央停車場受注，宝塚新温泉竣工

1912年　新世界・通天閣竣工

同年（大正元）　北陽演舞場着工

1913年　百三十銀行曽根崎支店竣工

1914年　東京中央停車場竣工

1915年　北陽演舞場竣工

北陽演舞場の建築時期は東京中央停車場の工事時期とほぼ重なる。多くは木造ではなく，煉瓦造や鉄骨造，鉄筋コンクリート造であった。

和風美術建築とは，単に伝統的手法によってつくられる和風建築ではなく，あえて「美術」という以上，あるデザイン的な意図をもってつくられ

図－1　外観図（図版の写真提供：（株）大林組）

る和風建築である。大林組ホームページによれば，「建築様式は，藤原時代より室町及び桃山時代を貫く代表的建築物の粋を巧みに織り交た御殿風と称すべきもの」[8]とみえ，また『大林芳五郎伝』にも，「我邦美術の精華とも称せられし藤原時代に則り之に稍現代趣味を加え」[9]とあるように，木造建築にこれまでの日本の各時代の伝統様式を取り込みながら，それに現代的な工夫を行ったことが読み取れる。さらに当時，京都府古社寺の技師であった亀岡末吉氏の指導を受けつつ進められた[10]といわれている。しかも，その実現にあたっては，芯去り四方無節の檜材を使用するなど，最高級の材料を使用している[11]。

大林組が採算を度外視して，社運を賭けるほどの決意で臨んだこの北陽演舞場は，先の大戦で焼失したが，手元にある図面や解説，写真を見る限り，意匠・デザイン，材料・工法，意欲的な設備の導入などにその息遣いを感じ取ることができる。

3.2　平面図の復元－動線を再現するために

本稿では，待合を併設する歌舞練場として，どのように使われてきたのか，主に動線の考え方を明らかにすることにより，座敷芸としての踊りが舞台芸として鑑賞されるようになった時代の人とモノの動きを再現する。

人とモノの動きを再現するには，平面計画を明らかにする必要がある。部屋の配置と用途を表現する室名を確定するところから始めなければならない。

幸い，『建築雑誌』第343号の「巻末付図説明」[12]に「曽根崎新地演舞場新築工事梗概」（以下「梗概」という）が掲載されている。北陽演舞場が竣工した同年４月の直後に発刊されたものであり，建設当初に想定された使い方に基づく室名が記載されていると考えてよい。

この「梗概」には工事概要，各階室，各部位ごとの仕様などが詳しく記述されているだけでなく，各階平面図，立面図，断面図，写真が19ページにわたって掲載されている。ただ，平面図は縮小して掲載されているため，室名を読み取ることはできない。

そこで，大林組が所蔵している図面の写しによって，CADで図面を復元していくこととした。平面図は数種類あったため，「梗概」掲載の図面に最も近い「改正図」[13]と表記されているものをもとに復元を行った。この図面は，細部にわたって寸法が記入されており，CAD化するのに大いに役立った。ところが，室名が判読できないものも多く，「梗概」の各階室に記載されている室名との比較表（表－1，2）を作成した上で，復元図には「梗概」記載の室名を記入して，動線判読用の基礎資料とした。

北陽演舞場は，本館棟と待合付属棟と倉庫棟の３棟で構成されている。本館棟と待合付属棟とは渡廊下で接続されており，この２棟には行き来があったことを表している。観客は，まず待合付属棟に入って接待を受けたのち，本館棟の観覧場へ向かうことが想像されるが，待合には，特等，一等，二等の区別があること，玄関が２つあることから等級によって動線が異なることが推定できる。「改正図」だけでは不明であったが，「梗概」との室名比較を行うことで見えてきたことがある。たとえば，待合付属棟には南に玄関が２つあり，図面には「玄関」とのみ記載されているだけで誰が利用するのか読み取れなかったが，「梗概」では「特等一等車寄」「二等昇降口」との記載があり，右（東側）の唐破風の玄関が特等一等用の玄関であること，左（西側）の入母屋屋根の玄関が二等用の玄関であることが判明したことである（図４参照）。こういったことが分かってくると，複数ある階段の使用者も見えてくる。

また，待合付属棟の２，３階の和室を，図面では「役員室」「取締室」「会議室」「予備室」と記載するが，「梗概」では「芸妓各化粧室」と表現している。舞台近辺に楽屋はないが，この部分が楽屋として使われていたのではないかと思われる。図面には，用途をより分かりやすく表現している「梗概」の室名を記載することとした。

観客は，特等，一等，二等と区別されている。ここで，本館棟の客席配置を確認しておきたい。

表1　室名比較（本館棟）

階	図面表記	梗概	備考
地下階		奈落	
		部屋	
		通路	
一階	（廊下）	玄関	図面は「廊下」と表記
		階段室	図面は階段の図のみ
	廊下	廊下	
	芸妓溜	芸妓溜室	図面には倉庫が付属
	弐等席	平場二等席	
	壱等席	一等観客席	
	舞台		梗概には記載なし
	地方席	左右桟敷舞台	
	後舞台	後方舞台	
		楽屋	図面では見当たらない
		便所	図面では便所の図
	客便所	付属客便所	
二階	貴賓席	正面貴賓席	
	特等席	左右特等席	
	特等席	中二階特等席	
	二階桟敷	左右桟敷	
	貴賓休憩室	貴賓休憩室	
	次室	同東西次之間	
	臨監席	臨監席	
	廊下	廊下	

写真①（113頁）は舞台側から客席を見たものである。2階部分中央に唐破風をいただく貴賓席，その両側及び中2階部分に特等席が設けられている。この貴賓席や特等席には，待合棟の2階から渡廊下を通って入るようになっている。

手前の1階の最も低い部分が二等席，その後方，少し高くなっているところが一等席である。

側面の1階，2階には桟敷席が設けられており，総踊りのときは1階の桟敷席は地方席として使われる。また，1階桟敷席に沿って左右に花道があり，それぞれ迫りをもっている。

3.3　観客動線

観客は，特等・一等・二等と3等に区分されている。それぞれの入場から退場までの動線を推定する。

まず，特等の場合，待合付属棟東側の特等一等車寄（唐破風の屋根を持つ玄関ポーチ）から玄関に入り（写真③，214頁），下足を脱いで式台を上がる。右に折れて正面の襖を開くと「特等喫茶

表2　室名比較（待合付属棟）

階	図面表記	梗概	備考
地下階	下足置場	下足運搬「モーター」室及坑道	図面では「モーター」室は見当たらない
	下足運搬之道		取出し口は敷地東端余地（屋外）？
一階		特等一等車寄	図面では文字表記なし
	玄関	同玄関	
		二等昇降口	図面では文字表記なし
	玄関	同玄関	
		一等表階段室	図面では文字表記なし
		特等階段室	図面では文字表記なし
	特等接待室	特等喫茶室	
		同縁側	図面では文字表記なし
		同付属水屋	床の左の二畳か？
	弐等待合室	二等休憩室	
	入側	同入側	
		同縁側	図面では文字表記なし
	化粧室	二等化粧室	
	便所	同便所	縁側の北詰
		一等後方階段室	図面では文字表記なし
	廊下	中庭廊下	
		本館渡廊下	図面では文字表記なし
	芸妓昇降口	芸妓昇降口	
	事務室	事務室	
	師匠部屋	師匠部屋	
	小使室	小使室	
		階段室	図面では文字表記なし
	廊下	廊下	
	便所	芸妓便所	
	脱衣室	脱衣室	
	浴室	浴室	
	湯沸場	湯沸所	
		舞台渡廊下	図面では文字表記なし
二階	階段室	特等階段室	
	特等待合室	特等休憩室	
		同縁側	図面では文字表記なし
	特等□□室	同酒場売場	
	化粧室	特等化粧室	
	特等便所	同便所	
		洋式便所	図面では文字表記なし
		一等階段室	図面では文字表記なし
	壱等待合室	一等休憩室	
	入側	同入側	
		同出窓	図面では文字表記なし
	化粧室	一等化粧室	
	便所	同便所	
	廊下	中庭廊下	
		本館渡廊下	図面では文字表記なし
	役員室、取締室、会議室	芸妓各化粧部屋	
		同階段室	図面では文字表記なし
		同廊下	図面では文字表記なし
三階	予備室	芸妓各化粧部屋	
		同階段室	図面では文字表記なし
		同廊下	図面では文字表記なし

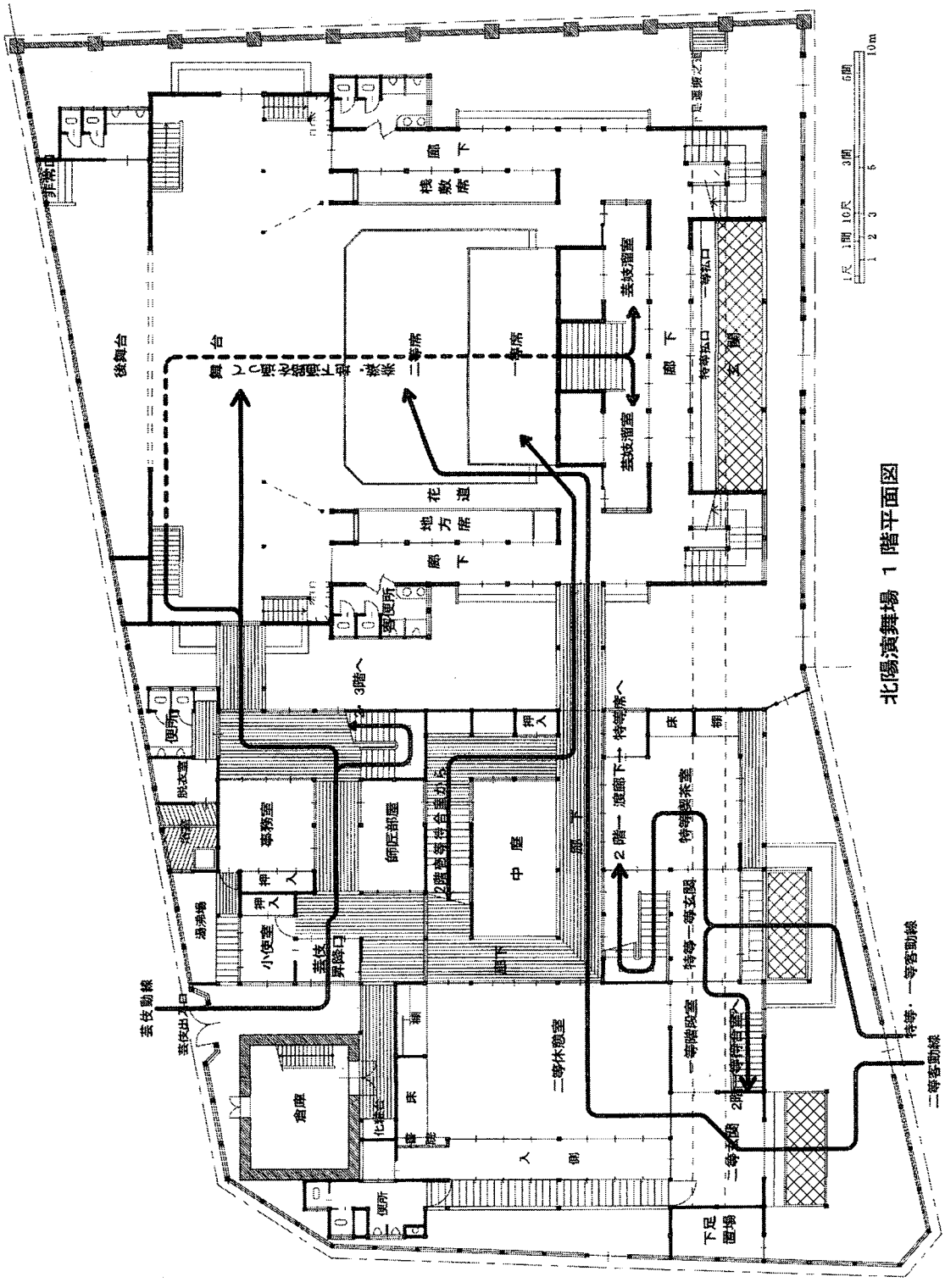

北陽演舞場　1 階平面図
舞台
後舞台
廊下
桟敷席
二等席
一等席
地方席
花道
芸妓溜室
玄関
一等払口
特等払口
便所
3階へ
脱衣室
事務室
師匠部屋
中庭
小使室
芸妓昇降口
芸妓動線
芸妓出入口
倉庫
二等休憩室
一等階段室
特等・一等客動線
二等客動線
下足置場
2階へ
特等席へ
特等奥茶室
特等一等玄関
二等玄関
入口側

図2　動線図（1階）

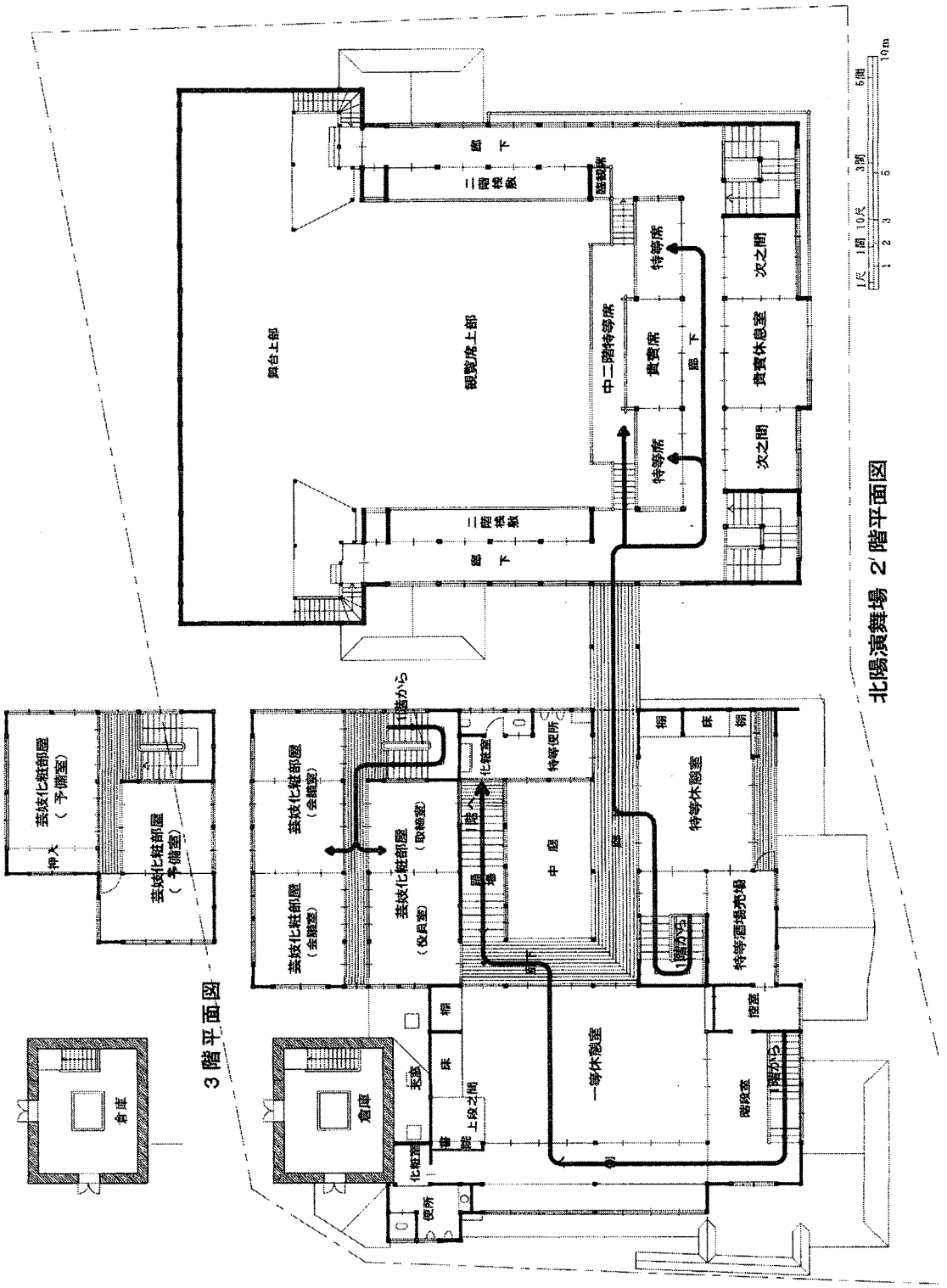
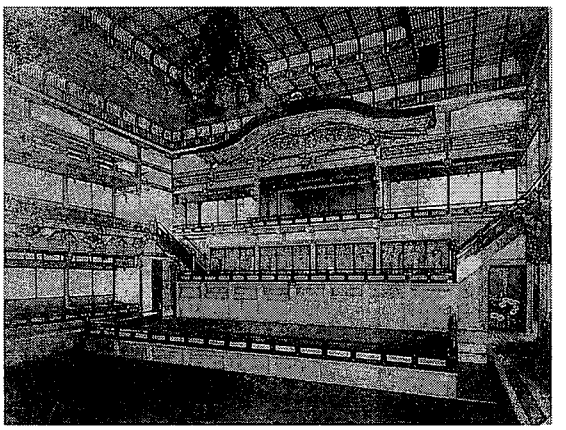
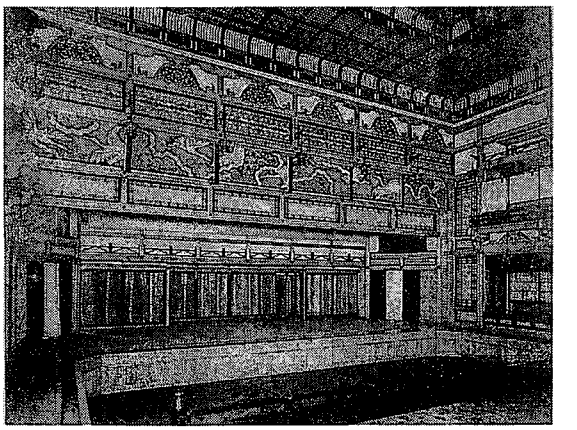

北陽演舞場 2′階平面図
3階平面図
舞台上部
観覧席上部
廊下
二階桟敷
廊下
二階桟敷
廊下
廊下
廊下
廊下
中二階特等席
特等席
貴賓席
特等席
次之間
貴賓休息室
次之間
芸妓化粧部屋（予備室）
芸妓化粧部屋（予備室）
芸妓化粧部屋（全盛室）
芸妓化粧部屋（全盛室）
芸妓化粧部屋（取締室）
芸妓化粧部屋（仮員室）
化粧室
特等便所
中座
特等休憩室
特等酒肴搬出口
控室
一等休憩室
階段室
倉庫
倉庫
玉座
上段之間
化粧室
便所
棚
床
棚
1階から
2階へ
1階から
2階から
1尺 1間 10尺 3間 5間 10m
1 2 3 5

図2　動線図（2，3階）



写真①　舞台から客席を見る。(提供：(株) 大林組)



写真②　花道より舞台を見る。舞台の前の客席が二等席。(提供：(株)大林組)

室」で，ここで湯茶の接待を受ける。今でいうウエルカムドリンクの提供である。床の北側の2畳大の部屋が湯沸室で，そこからサービスがなされたと思われる。床や違い棚を有する和室の造りとなっているが，机・椅子を配置して椅子席としている[14]（写真④，214頁）。

休憩後，西側の襖を開いて特等階段室を利用して2階に上がると，縁側付の「特等休憩室」に至る。ここは，天井は折上格天井，付書院・床・違い棚を備えた本格的な書院造の和室である[15]が（写真⑤，214頁），併設されている「酒場売場」は椅子座でくつろげるようにもなっている[16]。

開演時間が迫ると，休憩室北側の襖をあけて廊下に出，右に行って本館への2階渡廊下をわたる（写真⑥，214頁）。本館棟の客席には2種の特等席が準備されている。一つは半階下がった中2階に設けられたもの，もう一つは貴賓席の両側に設

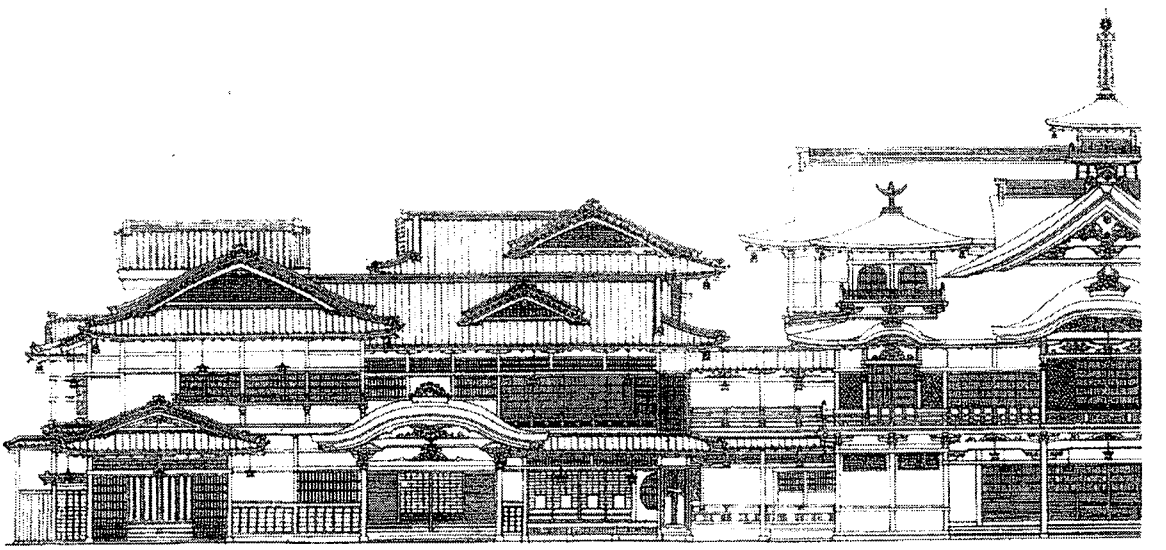
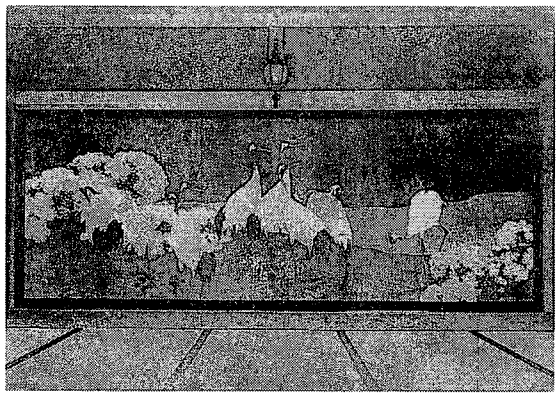
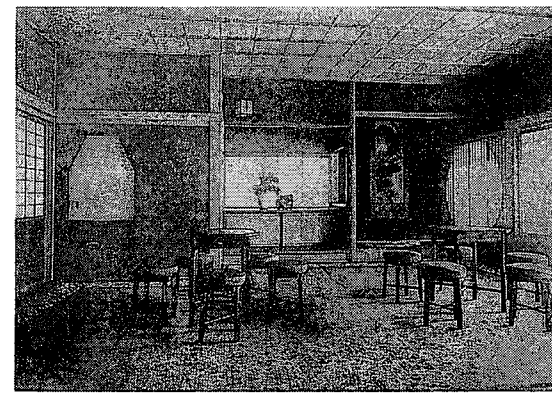


図4　待合付属棟正面図（提供：(株)大林組1.1－20）



写真③　特等一等玄関（提供：(株)大林組）



写真④　特等喫茶室（1階）。中央の床の左側が湯沸室。（提供：(株）大林組）

けられた2階席である。

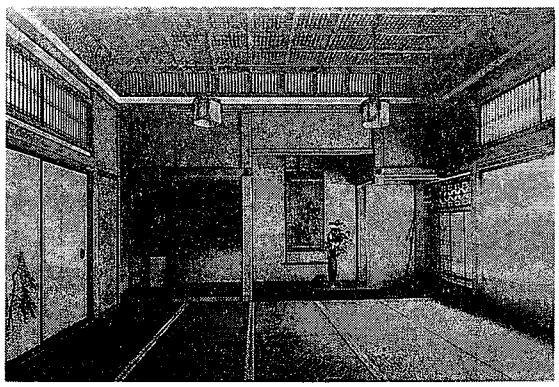
終演になると，それぞれの席から，本館棟南側の東西に設けられた2つの階段を降りて1階の出口に至る。図面には，本館玄関の中央部に「特等払口」との表記があることから，そこで下足を受け取って，退場したものと考えられる。

次に一等の場合，特等の場合と同じく待合付属棟の特等一等車寄から玄関に入る。玄関の左（西側）の一等階段室を上がって，2階の一等休憩室に至る（写真⑦）。ここは40畳ほどの書院造の大広間となっており，出窓付きの入側にはテーブルと椅子が置かれていて，入側からは便所や化粧室を利用することができる（写真⑧）。出窓には盆栽が飾られているのが写真から読み取れる[17]。湯茶の接待ができるような一等専用の部屋はなく，湯茶の接待は特等客に限られていた可能性が高い。

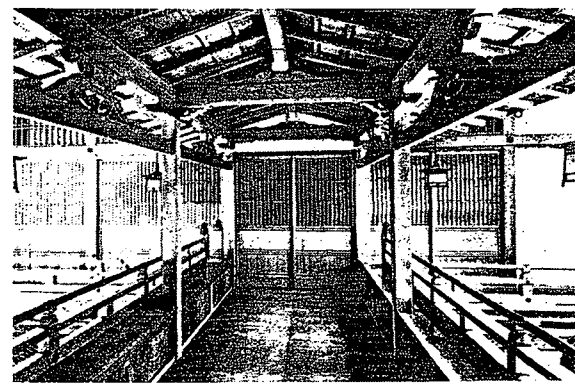
開演時間が迫ると，中庭に面した廊下に出て，中庭北側の一等階段室を使って1階に下りる。本館への渡廊下をわたって1階に設えられた一等席に着座し鑑賞する。

終演になると，一等席から左右の通路を通って出口に行き，図面には，本館玄関の東側に「一等払口」との表記があることから，ここで下足を受け取って退場すると考えられる。玄関西側には「払口」の表記がないが，ここも一等払口であった可能性があり，この場合，中央が特等払口，その左右が一等払口となる。二等客は特等客・一等客が退場するまで客席で待たされることになる。

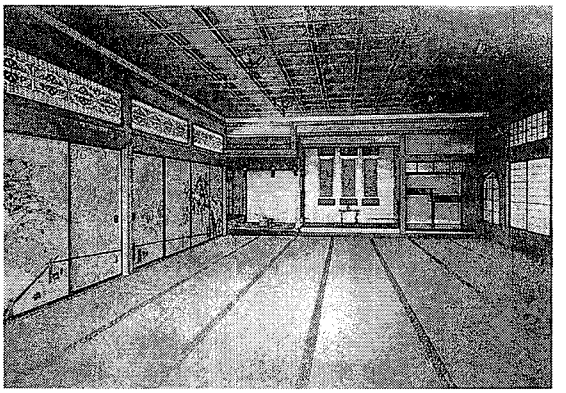
一等の場合，休憩室が階上にあるため，一旦2階に上がり，1階にある観覧席に下りてくるといった階段の上り下りが発生している。



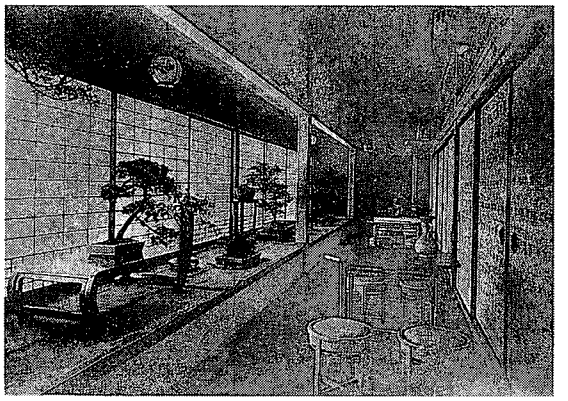
写真⑤　特等休憩室（2階）（提供：(株)大林組）



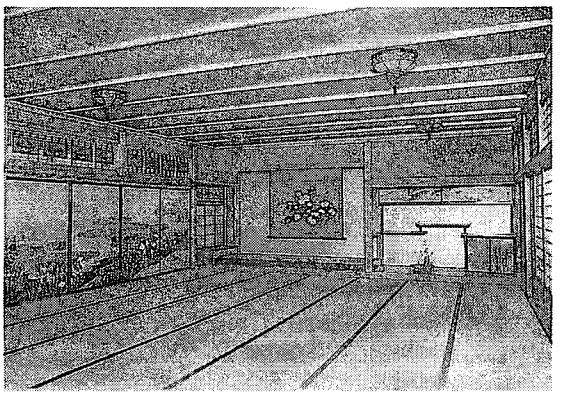
写真⑥　階上渡廊下（『建築雑誌』第343号から引用）



写真⑦　一等休憩室（２階）（提供：(株) 大林組）



写真⑧　一等休憩室の入側と出窓（提供:(株) 大林組）
テーブルと椅子が置かれている。



写真⑨　二等休憩室（１階）（提供：(株) 大林組）

二等の場合，待合付属棟西側の２階昇降口（入母屋屋根の玄関ポーチ）から下足を脱いで，２段の階段を上がって玄関に入る。玄関から北側の入側と縁側が併設された二等休憩室[18]に入る（写真⑨)。二等休憩室は，正面に付書院，床，違い棚をもつ書院造りであるが，天井は竿縁天井となっており，特等・一等よりグレードを下げた仕上げとなっている。

開演時間が迫ると，中庭に面した廊下を伝って渡廊下を渡り，本館棟の二等客席に至る。二等客席は，一等客席より一段低く舞台前に設けられている。

終演になると，一等の場合と同様，二等席から左右の通路を通って出口に行き，そこで下足を受け取って退場する。

なお，図面には「貴賓室」「貴賓休憩室」の表記があることから，華族等の来場を前提とした造りとなっている。貴賓の動線については，一般客の動線と交わらないよう配慮されていたはずであり，想定されるのは，本館玄関から入場し，階段で２階の貴賓休憩室に至る動線である。一般客の入場完了を待って貴賓席に入り，終演時は，一般客を客席に止めた状態で，階段を下り本館玄関から退場したのではないかと推測される。

以上が，図面から読み取った等級別の動線の考え方であるが，運営上の工夫がなければ混乱するのではないかと思われることがある。

一つは，待合付属棟から客席へ移動する際，特等の場合は問題ないが，一等と二等は動線上交錯する箇所があり，時間差をつけて観客を誘導したのではないかと考えられる。

今一つは，下足の扱いである。図面・「梗概」に「下足運搬モーター室及び坑道」という記述があり，平面図では敷地西側の下足室から東側の取出口を結ぶ地下坑道の存在が点線で示されており，断面図でも幅約５尺（1.5m）高さ約3.5尺（1.2m）の坑道とベルトコンベアーと思われる設備が２列配置されているのが確認できる。このことから，下足は，開演中に西端の下足室から東端の取出し口まで坑道に設置されたベルトコンベアーで

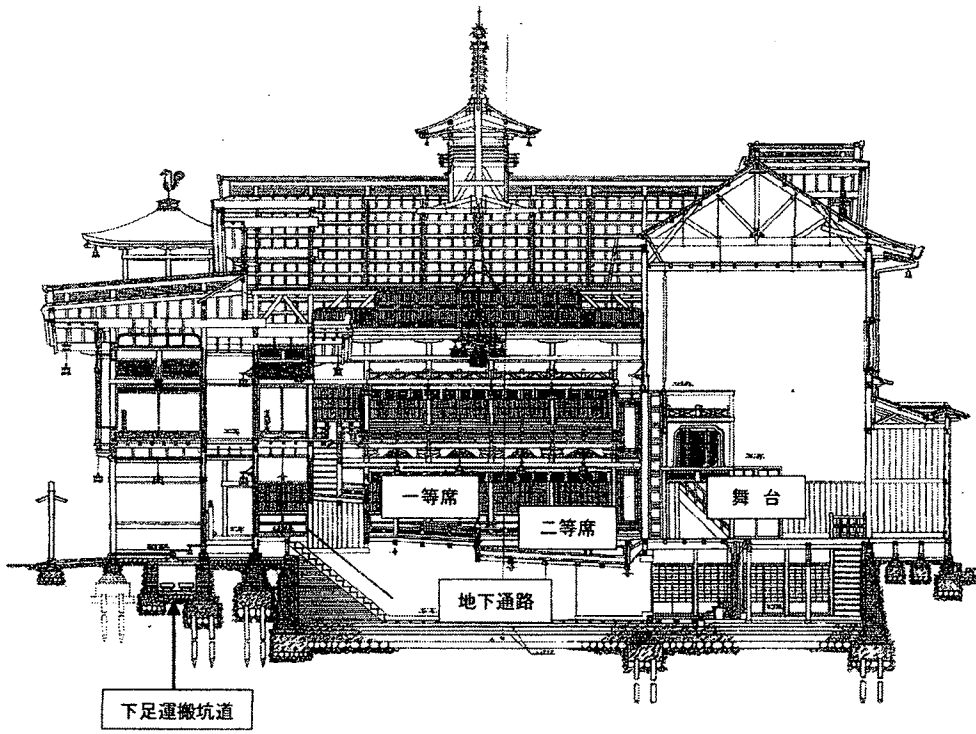


図５　本館断面図（南北）（図版提供：㈱大林組 1.1－18）

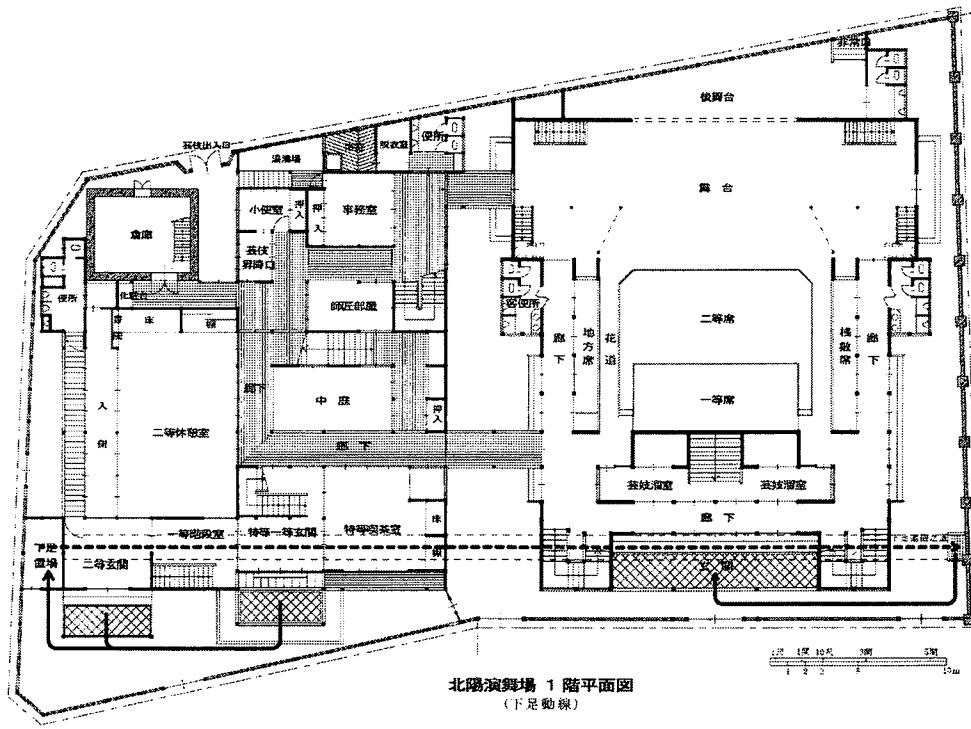


図６　下足動線図

運ばれ，退場はすべて本館棟南の出口から行われたと考えられる[19]。もしそうであるなら，下足そのものはオートマチックに運ばれたとしても，どのようにして持ち主に間違いなく渡せるようにするか，下足管理にあたる人員を準備し，なおかつ，退場時の混雑を避けるため，時間差の誘導を行わなければならない。

これほどまでの設備を設け運営体制を整える背景には，1日数回，浪花踊公演を行うとされる演舞場にあっては，一方通行によりスムーズに入退場を行うことが求められていたことがあると考えられる。

3.4　裏方動線

裏方動線として考えられるのは，出演者としての芸妓やそれを支える裏方の人たちと大道具などのモノがある。それらの出入りは，敷地北側の道路から行われる。

出演者や裏方の人たちは，芸妓出入口の門をくぐって，芸妓昇降口から待合付属棟に入る。事務室で出席届を行い，師匠室で師匠方に挨拶をしてから2・3階の芸妓各化粧室に上がり，出演準備を行う。出番が近づくと1階に下りて，渡廊下をわたって本館棟の舞台に至る。舞台と花道を行き来するために地下の奈落から地下通路を使って，客席後方の芸妓溜室に控える場合もある。

芸妓各化粧室は，図面では役員室・取締室・会議室・予備室などと記載されており，公演がない時はそれぞれの用途に使うことが予定されていたとも考えられる。

大道具等は，舞台北側の非常口から出し入れされたと考えられる。

むすびにかえて―北陽演舞場の位置―

以上の考察と復元によって，北陽演舞場の平面構成と観客の動線は，ほぼ解明されたといっても過言ではない。演舞場本館棟における「貴賓席」以下4等級に区分された観客席，これに対応する待合棟の「特等」以下の休憩室等の複雑な構成，さらには各等級の観客が辿る動線は，図面だけでは判別しがたく，場所が特定できない写真もあったが，今回の作業で全てが判明した。

浪花踊観客がどこから入り，どの通路を経て休憩室に落着き，どのような接待を受け，渡り廊下を通って本館にどう足を運んだのか，その折々に彼らが目の当たりにした光景までを，想定することが出来るようになった。本稿では紙幅の都合で，玄関襖絵に始まり，各等休憩室の板戸・襖絵・釘隠・照明器具などの紹介は出来なかったが，それぞれ贅を凝らした調度である。観客はこの場に身を置き，まもなく始まる浪花踊の趣向に思いを馳せつつ，しばし非日常の世界に遊んだ。北陽演舞場は単なる劇場ではなく，その建物・施設全体が，浪花踊の舞台装置であった。

現代の劇場は，北陽演舞場のように待合空間とホール空間が別棟になっている例は稀有と思われる[20]。待合空間（ホワイエ・喫茶・レストラン）とホール空間（舞台・客席・楽屋）は一つの建物の中に納められている。戦前期の劇場建築においても，このような事例は殆ど知られていない[21]。現時点では，事例すべての探索は出来ないので，さしあたり大阪四花街に限り，各演舞場の仕様や観客の接待について，知り得たことを記しておきたい。

設計図や竣工時の写真が豊富に残っているのは，北陽演舞場に限られる。そこで他の三演舞場については，各廓が開催した「春の踊」の番付等によって，その概略を知ることに努めた。

南地演舞場は明治時代の和風建築であったが，残された写真や記述が極めて少ない[22]。ただ，観客席に「特等，一等，二等」の別があったことは明らかで[23]，番付にも，「特等・一等」の「抹茶給仕」（人名）が記されている[24]。待合室も等級別に分かれていたと思われるが，別棟であったか否かは未詳である。

堀江演舞場は，1914年（大正3）に竣工した純日本建築であった。この建物は1916年に焼失したが，残された番付の記述[25]によれば，当初から3館構成であったようである。番付は，「貴賓及び

特等待合室は平安朝に室町時代を加味したる八角殿堂」と記され，その写真も掲載されていて，おそらく演舞場の敷地東北角[26]に独立して建てられていたと思われる。この建物と本館（劇場），一等，二等の待合室等の別館が渡廊下で結ばれていたのであろう。

演舞場は1917年，同じ場所に再建された。同年の番付[27]は，「天平時代の手法に則り，是に近代の建築法を斟酌した」と謳い，詳細な「梗概」と写真を掲げている。「八角殿堂」は再建されなかったが，従前通り本館，特等館（仮称），別館の3建築があった。まず本館（181坪）は劇場で，座席には特等，一等，二等の区別があり，貴賓用の席も用意されていた。特等館（15坪）は特等待合・同茶室のみの施設で，焼失前の「八角殿堂」に相当する建物である。やはり敷地の東北角に置かれたのであろう。また別館（87坪）は2階建てで，階上に一等待合室（60畳余）と稽古場（60畳余），階下には二等待合室（40畳余），応接室事務室，小使室，炊事場等が置かれていた。残念ながら図面が無いので，観客の動線等は推測できない。

新町演舞場は1892年に創建されたが，30年後の1922年に改築された。片岡建築事務所の設計，竹中工務店の施工で，壁体は総煉瓦，床は鉄筋コンクリート造り，地上3階地下1階の洋風建築である。竣工直後の番付には「演舞場新築要旨」と題し，詳細な記事を掲げている[28]。

また同番付の口絵写真「場内」によれば，劇場の天井は二重折上格天井で，舞台に最も近い客席は平土間であり，その背後に雛壇式の桟敷が設けられ，最後列には椅子席となっている。また一段高く，欄干付の桟敷が認められる。記事を参照するに，平土間は「二等」椅子席，その背後の座席及び椅子席は「一等」・「特等」座席，欄干付桟敷は二階に設けられた「貴賓観覧席」と思われる。

待合室は記事によると，一階に「一等待合室，同予備室」，二階に「特等待合室」「第一～第三貴賓室」が置かれているが，「二等」客の待合室は記載されていない。おそらく一階の，「広間」を充てたものであろう。口絵には「特等休憩室」「壱等休憩室」「三階大広間」の写真が掲げられており，前二者は洋室椅子席，後者は舞台付和室（竿縁天井）である。

また地階の「大食堂」には，外部から直接出入できる専用口が設けられた。このことや二等席（平土間）の設えをみると，観客は下足のまま入場した可能性もある。地階「下足室」は芸妓や囃子方のための施設で，彼等は地階で履物を脱ぎ，「南北囃方昇降機」（エレベーター）で上階へ移動したのではなかろうか。いずれにしても，詳細な平面図の出現が待望される[29]。

なお，特等・一等には抹茶の接待があり，特等客は「椅子手前」で和菓子が供され，一等客は「台子手前」で「長四だんご」が供された[30]。客席に「参等」を設けることもあったらしい[31]。

以上のように大阪四花街においては，「春の踊」観客を等級別「待合」で休憩させ，特等他には抹茶等で接待し，等級別観覧席に案内することに共通性がある。この点は，芸妓の座敷芸を基本とする花街特有の，観客接待と考えることもできよう。また，北陽，堀江の両演舞場は，別棟の待合棟を設けていた。一方，新町は劇場と待合が一体構造である。南地については構造が不明であるが，明治期の建築である。ここで各演舞場を，着工・竣工順に排列してみよう。

表3　各演舞場の着工・竣工年代と待合室

花　街	設 計	着 工	竣 工	構　造	待合室
南　地	（明治時代）			木造	（未詳）
北新地	－	1912年	1915年	木造鉄骨	別棟
堀江①	－	1913年	1914年	木造	別棟
堀江②	－	1917年	1918年	木造	別棟
新　町	1919年	1920年	1922年	鉄筋コンクリート	同一棟

大正期前半に建てられた演舞場は何れも別棟の待合室を有したが，その後半期においては現代の劇場建築に近い建物が建てられるようになった。恐らく明治期の南地演舞場も，北新地や堀江と似通った構造を有したものと思われる。また北新地

と堀江の演舞場は，着工・竣工の時期が近接しており，互いに影響を与えつつ設計・施行がなされた可能性もある。

以上の考察をふまえると，北陽演舞場は大阪花街において孤高の存在ではなかったと思われる。しかし工期の長さ[32]，規模，仕様，調度その他において，群を抜いていたことは疑う余地がない。

為政者が文化をも占有し，権力誇示を目的として建物に絢爛を競った事例は，史上に遑がない。しかし花街演舞場は，富裕層が集う特別な場ではあったが，「春の踊」公演に象徴されるように，市民一般にも開かれていた。大阪市民がこの「場」で何に接し何を感じたかは，今後筆者らが継続して追究すべき課題である。

【注】

1）笠井津加佐・笠井純一「北陽浪花踊の新出史料と大阪四花街「春の踊」の変遷」(『人間社会環境研究』第32号，2016年)。124頁引用，南木芳太郎の一文を参照。

2）笠井津加佐・笠井純一「明治後期における大阪花街の変貌と「春の踊」競演の出現」(『人間社会環境研究』第34号，2017年)。197頁の注26）参照。ここに紹介した南木氏，脇田氏の事例の他，幼少時の竹本住大夫氏も北陽演舞場で浪花踊を観覧した（2015年4月23日の聞取り記録による)。

3）笠井純一・笠井津加佐「戦前期「北の新地」街並みの復原―竹本住大夫氏，田村富子氏，肥田晧三氏，西川梅十三氏の聞取り記録と文献史料をもとに―」(『金沢大学日本史学研究室紀要』第３号，2017年)。

4）『建築雑誌』第343号（1915年７月）巻末付図説明「曽根崎新地演舞場新築工事便概」。

5）廣岡幸義「大正期における日本建築新様式「亀岡式」について―亀岡末吉作品研究―」(関西大学修士論文，平成15年度修了，指導教授永井規男教授)。藤田勝也教授のご教示による。

6）原典は，白田喜八郎編著『大林芳五郎傳』大林芳五郎傳編纂会（1930年)。2015年に創業者大林芳五郎没後100年を記念して，㈱大林組がウエブサイトに公開している。引用は，「第二編　本記　三十四　北陽演舞場工事　四十九歳－五十二歳」から。

7）㈱大林組ホームページ「おおばや史」礎の時代 https://www.obayashi.co.jp/history。

8）注７）参照。

9）注６）前掲書。

10）注６）前掲書。

11）注６）前掲書「日本産檜の節無し　曽根崎新地組合総取締　大西熊吉氏談」。

12）注４）参照。

13）1.1のうち４「曽根崎新地歌舞練場新築設計図　階下平面図　縮尺壱百分之壱改正図」(№３のゴム印）および「曽根崎新地歌舞練場新築設計図　階上平面図　縮尺百分ノ一改正図」(№５のゴム印)。

14）注４）「同喫茶室の天井は北山丸太の面皮付の竿縁に吉野杉白笹杢の天井板を張り」。「同喫茶屋の装飾は主として茶室趣味を加へ長押竿縁及床框等は北山丸太の面皮付になし床框は「ミボ」丸太棚前無目は「ゴマ」竹等を用ひ床脇には円窓を付し腰障子及襖とも其腰に漆曳板皮網代を用ひ尚同室用の卓子及椅子は竹網代の鏡に煤竹の縁を繞らし面皮付紅溜塗の脚に斑竹の貫を配する等同趣味に成れるものなり」。

15）注４）「特等休憩室は支輪付の折上げ小組格天井にして全部杉柾の白木造になし裏板は白堊を塗り」。「特等休憩室は正面中央に床を設け蝋色框を入れ高麗縁の床畳を敷込し縁側には付書院を付し床脇には本桑の違棚に上下袋を取設け書院及床脇地板は欅の玉杢を用ひ本蝋色研出に塗り違棚には銠金具を取付け縁側は腰障子建中廊下側は杉戸襖其他の仕切は両面襖を建付け襖及壁面とも嵐山春秋の景を画けり」。

16）注４）「同酒場は和洋折衷式の天井になし，其周囲は檜格縁を組み楓「ヴエニヤ」の天井板に張り，白「ラツク」にて塗り中央鏡の部分は張付下地になし鳥子の上張に絵画を画き其輪廓に軟錦縁を繞らせり」。

17）注４）「一等休憩室は三十八畳敷の広間にして天井及内法長押を繞らし正面中央に一間半の床を設け框は黒蝋色床の板は欅杢の一枚板にて張り本蝋色研出になし床脇の一方には袋戸棚に本桑の醍醐棚を設け之に金金具を配ひ他方には二畳敷の上段の間を取り蝋色塗框にて区画し長押上は吹抜にな

し之に竹節付彫刻欄間を入れ其下に簾を吊し其脇に付書院を設く中庭側は棚際に光燈窓を付し腰障子建になし入側及階段室仕切の襖には四季の草花を画き尚其上には花狭間小組欄間を嵌込み入側は喫茶室となし日本趣味の卓子及椅子を配置し其出窓へは盃栽又は押花を陳列す又付属化粧室には古鏡型の姿見を吊し其下に新案に成る棚型の化粧台設置す」。「一等休憩室は白木の吹寄せ猿頬格天井にして猿頬面檜の格縁に杉柾の鏡板を板違ひに張り床前鏡天井は杉杢の一枚板張になし同室上段の間は杉柾の格縁に几帳面を取り桐柾の天井板に総砂子を施し」。

18) 注４）「二等休憩室は普通住宅風の座敷にして正面に二間床を取り蝋色框を入れ畳床になし床脇地板及違棚は白木の欅杢を用ひ袋及地袋には花鳥を画き床脇又院に付書院を付し入側及其他の仕切襖には桃山白双の八ツ橋を画き，同付属化粧室は茶室風を加味し円窓形の姿見に水屋釣棚様の化粧台を取付け天井は神代板布張りにごま竹の目板を入れ腰廻りは板皮網代張りになせり」。「二等休憩室の天井板は但馬妙見産幅三尺の杉中杢を用ゐ透張になし竿縁は同地産杉柾の通材を三尺間に入れ竿縁面へは白堊を塗り同室床天井は板杢一枚張りとなす」。

19) 注４）「観客は総て一旦待合所に導き茶菓の接待をなし演芸の開始を待ち階上鶯張廊下及階下渡廊下を経て本館に送られ一たび観覧を了れば直に本館より出場するの順序なるを以て其下足は待合所入口の西端より本館東端の払口に通ずる地下隧道に依り電力を以て迅速に送達すべき設備を施せり」。

20) 西川梅十三氏のご教示によれば，京都祇園甲部の歌舞練場では劇場と別棟になった楽屋はあるが，待合には使わない由である。

21) 永井聡子著『劇場の近代化―帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場―』（思文閣出版，2014年）は戦前期の劇場を扱った詳細な研究書だが，このような事例には言及がない。

22) 『第四十五回大阪名物あしべをどり』（南地番付，1929年）口絵に「南演舞場庭園」の写真が掲げられており，木造3階建建物の左右に別棟があるようにも見える。

23) 大林宗嗣著『民衆娯楽の実際研究』（大原社会問題研究所，1922年）60頁に，芦辺踊に「特等，壹等，貳等」席があったと明記される。なお温習会の時には，「参等」席も設けられたようである。

24) 『第四十二回あしべをどり』（南地番付，1927年）など。

25) 『第一回木花踊』（堀江番付，1914年，国立国会図書館デジタルアーカイヴによる）には，「新築の技芸練習場」として次のように記される。
「堀江遊廓技芸練習場は昨春その工を起し本年三月を以て落成したり，総坪数四百七十坪，本館，貴賓待合室，各等待合室等その構造は純日本式なり，外部の高塀は廻廊風にて貴賓及び特等待合室は平安朝に室町時代を加味したる八角殿堂なり，こは舞楽殿と絵馬堂を折衷したるものにて天井及び壁画は菅楯彦氏の彩筆に飾られ浪花青年画家八氏の筆に成る浪花芸苑八家撰の額画を掲げたり，貴賓観覧席は正面の高台に設け天井は菅楯彦氏壁画は上島風山氏なり，各等観覧席を雛段となし入場出場の口を区分し下足場は地下室を利用して混雑なからしめたり」。

26) 特定非営利活動法人 なにわ堀江1500編刊『なつかしの昭和 堀江戦前住宅地図』（改訂版）によって，堀江演舞場の立地を確認した。

27) 『第四回木花踊』（堀江番付，1918年）には，「演舞場新築梗概」として次のように記される（下線引用者）。
「堀江演舞場は大正六年五月一日工を起し，工事日数十有一箇月にして翌七年三月竣工したり，敷地総坪数四百七十五坪，建坪は本館百八十一坪，特等待合，同茶室十五坪，壱弐等待合室及び事務室八十七坪なり，西方に延長弐拾壱間半の防火壁をおき，本館の後方に亦延長弐拾壱間半の防火壁を築きたり
建物は天平時代の手法に則り，是に近代の建築法を斟酌したるものにして，用材は尾州産の檜を主とし，別館には栂，杉，檜等を混用したり，舞台間口七間半，僅かに檜皮の葺きおろしを見せたるのみ，多くの装飾を施さず，力めて見物し易からん事を期したれば特等観覧席の雛壇，壱等観覧席の傾斜，弐等席の構造等に意を用ひ，特等席の後方中央部には何時にても区画して貴賓席に充つべき設備をなし，洗朱塗の勾欄を付し，金砂子額縁の襖を閉て，その前面より東西桟敷にかけて平目緑青の簾をかけたり，また東西桟敷の框を上下自在とし，時に框を上げて地方席とし，時に框を下げて階上階下の客席となせり，花道及び舞台の脚灯に反射鏡を利

用して踊り子の顔面を照らさしめ，天井の電灯またサンデリアを廃して特殊の構造を成せり，而して特，壱等は出口を正面の大玄関とし弐等は地下室より東側面に通ずる事となせり

特等茶室及び待合室は天平式に平安朝後期時代の様式を加味したり，天井及び壁画は菅楯彦氏の筆にして階上の半蔀，階下の窓等特に意を用ひたるものなり，特等に反して壱等茶室は瀟洒なる数寄屋好みにして階上の待合室は六十余畳を敷く格天井の大広間，床には金砂子を撒き床脇に円窓を穿ち，鞘の室より化粧室便所等に通ず，この室と並びて階上には六十余畳を敷く稽古場，階下には四十余畳の弐等待合室，応接室事務室，小使室，炊事場等の設けあり

工事請負は中村奈良市にして壁画天井等の画は菅楯彦，久保井翠桐，山口草平，岡本大更，若林松渓の諸氏なり」。

28) 『第十二回浪花踊』（新町番付，1922年）に掲載の「演舞場新築要旨」には，次のように記される。

「舞台間口八間半客席は最前方を平土間とし百余の椅子席次に間口八間幅二間の座席を設け之が後方に三段の正面座席桟敷続て二段の椅子席桟敷を構へ階上に二段の桟敷を配置す総て客席は観覧の最も易からん事を期し全部正面向とせり花道は普通の形式と異り客席側面より舞台に対し八字形に延び其各後方に常設地方，囃子方の高座を設け電働装置の「エレベーター」及特殊の機能により地方の交替に便ぜり。

茶室，各等待合室之に付随せる食堂，及別室は特に装飾に意を用ひ窓懸け，絨緞家具の撰択は華麗を主とし各室其用途に由て特徴を異にす。

第三階の一部に約百畳敷の純日本式広間を設け之に四間半の舞台，喫煙室，湯沸場及部家を具へ専ら声曲に関する会合に使用する目的にて完全なる設備を施せり。

地下室の一部に大食堂を設け料理室其他を配し外路に通ずる専用出入口を付し常設の食堂経営をなす。

特種の設備としては冬季に有ては各室に通ずる蒸気煖房の外観覧席の為に温熱空気通風装置及夏季に在ては冷房通風装置を備へ又客席の換気装置として建物の頂端にある電働送風機に依り場内の悪気を排除転換せしむ電灯，電話，消火栓及便所の設備に関しては最新の方式に依つて構造装置を施したるものなり建築の概要左の如し。（中略）

各階諸室の配置

地　階	大食堂，料理室，配膳室，食堂便所，観客便所，出演者便所，湯沸室，小使室，汽鑵室，機械室，電力室，浴室，下足室，倉庫，奈落，携帯品預室，物置，南北囃方昇降機室
第一階	表玄関，東玄関，南玄関，北玄関，広間，喫煙室，一等待合室，同予備室，観客便所，南払口，北払口，湯沸室，観客席，南北囃子場，舞台
第二階	茶室，水屋，特等待合室，食堂，第一貴賓室，第二貴賓室，第三貴賓室，観客便所，出演者便所，事務室，第一部屋，第二部屋，第三部屋，貴賓観覧席，蔭囃場，綱場，配電室
第三階	休憩室，集会室，舞台，便所，湯沸室，第四部屋，第五部屋，物置，露台」。

29) 酒井一光「大阪屋（旧新町演舞場）」（『大阪人』第58巻4号，2004年）。当時残っていたこの建物の一部が，写真付きで紹介されている。

30) 『第十三回浪花踊』（新町番付，1923年）など。

31) 『浪花踊』（第七回 新町番付，1914年）には観覧料として，「特等壱円五拾銭，一等壱円，弐等六拾銭，参等五拾銭」と記される。

32) 北陽演舞場（敷地総面積525坪，本館建坪192坪，待合棟建坪163坪）は1912年12月に起工し，竣工は約２年４ヶ月後の1915年４月であった。同じ木造建築の堀江演舞場（再建）は1917年５月に起工したが，１年を経ずして翌年３月には落成している。

謝辞

本稿の基礎資料をご提供くださり，本稿に掲載を許可してくださった大林組総務部社史課に，厚く御礼申し上げます。同課長：平田孝之様，同課：荒田智康様には，特にお世話になりました。また大阪医科大学相談役・金沢大学経営協議会委員：國澤孝雄先生，大林組営業部副部長：宮口一郎様にも，多大のご支援を頂きました。建築史上のご助言を頂いている関西大学環境都市工学部教授：藤田勝也先生，同窓のご縁で様々のご支援を頂いた兵庫県立神戸高等学校元教諭：永田實先生，大

阪花街や演舞場について詳しくご教示くださった竹本住大夫様，田村富子様，肥田晧三先生，西川梅十三様のお名前とともに銘記し，深甚の謝意を捧げます。